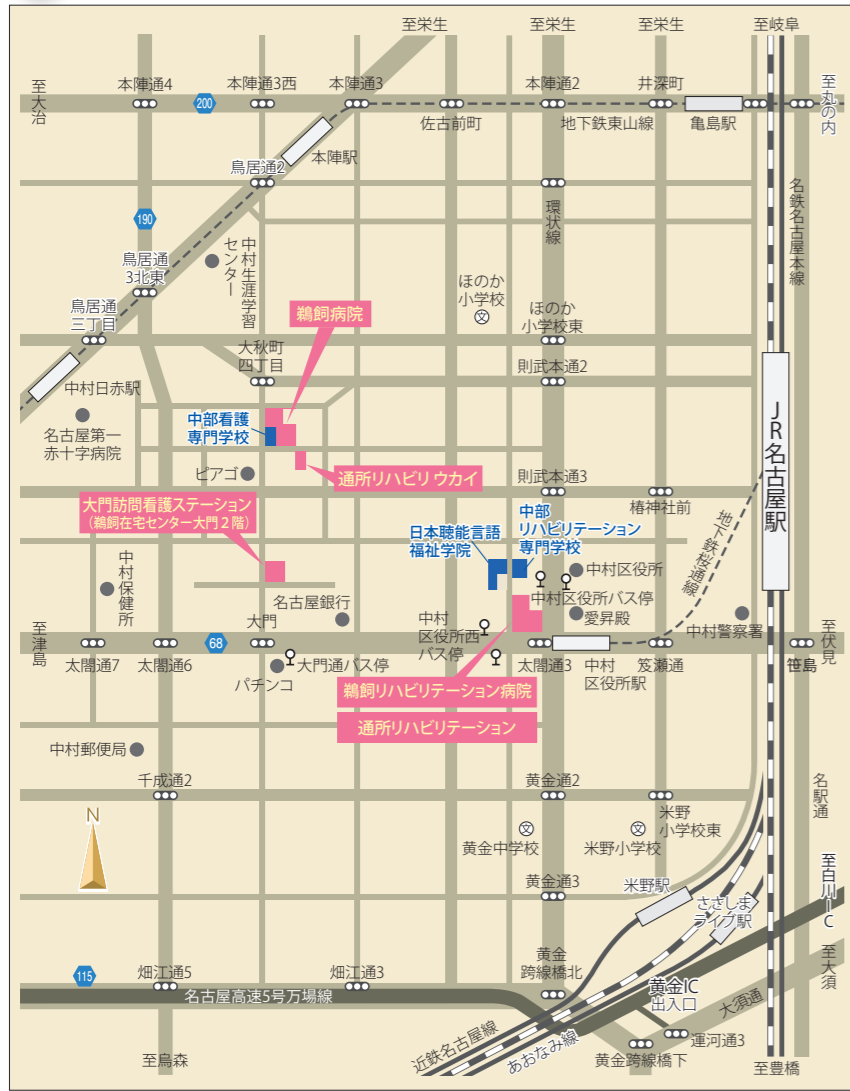


ご案内図



交通アクセスのご案内

- 地下鉄/桜通線「中村区役所」①出口より.....徒歩約 1分
- 市バス・名鉄バス/「中村区役所」下車.....徒歩約 1分
- JR名古屋駅太閤通口より.....車で約 5分
- 名古屋高速道路「黄金」ICより北へ.....車で約 5分



当院は、
医療機能評価
認定病院です。

URH 医療法人 珪山会
鵜飼リハビリテーション病院

〒453-0811 名古屋市中村区太閤通 4-1
TEL 052-461-3132 FAX 052-461-3231
Eメール mail@kzan.jp ホームページ <http://www.ukaireha.kzan.jp/>

時代のニーズに応える
珪山会グループ

鵜飼 病院
TEL 052-461-3131
FAX 052-461-3136
名古屋市中村区寿町30

鵜飼リハビリテーション病院
TEL 052-461-3132
FAX 052-461-3231
名古屋市中村区太閤通 4-1

通所リハビリテーション
TEL 052-461-3237
FAX 052-461-3238
名古屋市中村区太閤通 4-1

通所リハビリウカイ
TEL 052-461-9195
FAX 052-461-3107
名古屋市中村区寿町 6-1

**大門訪問看護ステーション
(鵜飼在宅センター大門 2階)**
TEL 052-471-2533
FAX 052-485-9702
名古屋市中村区賑町26

中部リハビリテーション専門学校
TEL 052-461-1677
FAX 052-471-2333
名古屋市中村区若宮町 2-2
<http://www.chureha.kzan.jp/>

中部看護専門学校
TEL 052-461-3133
FAX 052-483-0873
名古屋市中村区寿町29
<http://kango.kzan.jp/>

日本聴能言語福祉学院
TEL 052-482-8788
FAX 052-471-8703
名古屋市中村区若宮町 2-14
<http://ncg.kzan.jp/>

鵜飼リハビリテーション病院
ハートフル情報誌
ReHappy!
Vol.78

鵜飼リハビリテーション病院 ハートフル情報誌

ReHappy!

リハッピー

Vol.78

発行人/鵜飼泰光
発行/鵜飼リハビリテーション病院広報委員会
名古屋市中村区太閤通 4-1
<http://www.ukaireha.kzan.jp/>
編集/鵜飼リハビリテーション病院広報委員会
編集グループ
編集協力/プロジェクトリンク事務局
発行/令和4年1月1日

〈特集〉

患者さんの願いを
決してあきらめない。



URH 医療法人 珪山会
鵜飼リハビリテーション病院

患者さんの願いを 決してあきらめない。

「もう少し動けるようになったら、こんなことがしたい、あんなことがしたい」。
リハビリテーションの目標は、患者さん一人ひとりによって異なる。その思いを探り出し、実現に向けてバックアップするのが、鵜飼リハビリテーション病院のチーム医療のモットーである。患者さんの思いを叶えるシリーズ、今回は病棟看護師の取り組みをレポートする。



3階病棟
看護師 山崎麟花

交通事故に遭い、 頸髄を損傷して。

鵜飼リハビリテーション病院に入職して、3年目を迎える看護師の山崎麟花。その山崎の心に残る60代の男性患者（Mさん）のエピソードである。



山崎がMさんに出会ったのは、新型コロナウイルス感染症が猛威をふるっていた最中のこと。Mさんは自転車に乗っていて交通事故に遭い、頸髄（けいずい）を損傷。急性期の治療を受けた後、リクライニング型の車いすで同院に搬送されてきた。このときは、四肢を動かすことはもちろん、自分で排尿をコントロールすることもできなかった。一般に頸髄損傷は、四肢に重篤な障害を残す。損傷の状態によっては麻痺が治らないことも多いが、感覚や運動の一部が残存する場合は、集中的なリハビリテーションによって回復する可能性がある。Mさんも「必ず良くなってみせる」という強い決意を持って、同院にやってきた。

Mさんの担当になった山崎は、こんなふう振り返る。「Mさんは並々ならぬ強い意志を持っていて、『まずは歩けるようになりたい、そして絶対家に帰りたい』と何度も話していました。最初は立ち上がることも難しい状態でしたが、Mさんは元アスリートで、筋肉もあり、体幹もしっかりしています。ある程度は動けるようになるだろうと、医師や理学療法士は評価していました」。

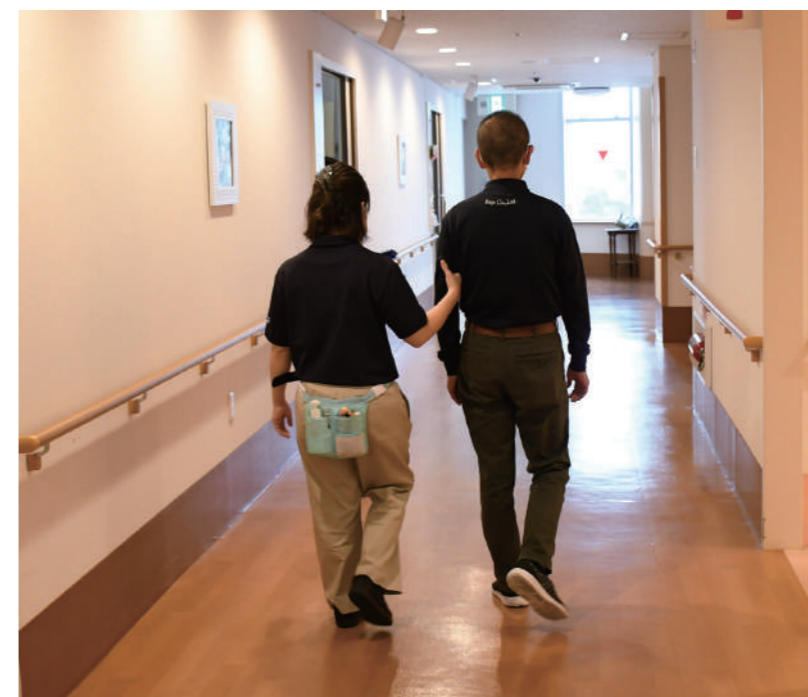
入院初日から早速、離床をめざしたリハビリテーションが始まった。山崎が熱心に取り組んだのはベッドサイドを頻繁に訪れ、一緒に起きる練習をしながら、話しか

けることだった。最初は天気や食事の話など当たり障りのない話題から。やがて、患者さん自身のこと、家族のこと、スポーツや仕事のこと、趣味の話などをさりげなく聞き、心の距離を縮めていった。「これはすべての入院患者さんにしていることですが、退院後にどんな生活をしたいか、ということができる限り詳しく聞き出すよう心がけています。その情報をチームのメンバーに伝えることで、より明確な目標を掲げてリハビリテーションを進めることができます」と山崎は説明する。



娘の結婚式に どうしても出席したい。

山崎や他のスタッフがアプローチするなかで、Mさんには大きなイベントが待ち受けていることがわかった。2カ月半後に予定されている娘さんの結婚式だ。コロナ禍で何回か延期になり、ようやく開催が決まったところだった。「その頃のMさんは、血圧が不安定で長時間座っていることさえできない状態。チームの誰もが、2カ月半で結婚式に参加するのは難しいと感じていました。でも、〈どうしても結婚式に出席したい〉というMさんの強い願いを、私たちがあきらめることはできません。Mさんには『大丈夫、きっと参加できるようになりますよ』と声をかけ、チームのみんなで作戦を練りました」（山崎）。Mさん自身も熱心に自主練習に励み、日々少しずつ手足が動くようになっていった。そして、リクライニン



グ型の車いすから、普通の車いすへ、杖歩行へと、目を見張るスピードで回復していったのである。「私たちの計画では、結婚式に出席できない場合も、病院からリモートで参加してもらおうと考えていました。でも、最終的には、そんな準備は不要になりましたね」と山崎は笑う。山崎も、空いた時間を見つけては、病棟内を歩く練習につき添い、少しでも歩行が安定するようにサポート。さらに、コロナ禍で面会できない家族のために、歩行訓練の様子を動画で撮って送信するなど、きめ細かい対応を尽くした。「とりあえず今、できることは何でもしようと考えました。結婚式に参加させてあげたいという思いの熱量は誰よりも高かったかもしれません」と山崎は言う。

身体機能は順調に回復していったMさんだったが、そこにもう一つ、難問が立ち上がった。それは、コロナ禍での外出のリスクだ。当時、入院患者さんの一時外

出は原則禁止。外出の安全性をどうすれば担保できるか、感染症対策委員会のメンバーに相談することになった。「まずホテル側がしっかりと感染対策をできているか書面で詳しく確認しました。また、ご本人には、マスクを外さない、会場で食事を取らない、病院に帰ったあとは数日間病室から出ないなど、万全の感染対策をお願いしました」と山崎。そうした努力の結果、Mさんは無事結婚式に参加することができた。結婚式当日、Mさんは家族に連れられ、にこやかな表情で戻ってきた。「みなさんのおかげで、娘の晴れ姿を見ることができました」と、明るい口調で語るMさん。娘さんとバージンロードを歩く写真を見せてもらい、山崎は思わず感動して胸が熱くなったという。

患者さんが話したいときに話を聞けるのが、看護師。

Mさんのケーススタディを振り返り、副主任の徳井信子(看護師)は、「関係するスタッフが丸となって取り組んだ成果だと思います。主治医や感染対策委員会は



3階病棟 副主任 徳井信子(看護師)

安全第一で外出に慎重な立場を取ることが多いですが、今回は山崎をはじめとしたスタッフの情熱がその心も揺り動かしましたね」と評価する。

では、そのチームのなかで、看護師はどんな役割を果たした

のだろうか。「大きく分けて二つあると思います。一つは、生活リハビリです。セラピストが行うリハビリテーションは基本的に1日3回、各1時間ずつ。それ以外の生活時間をいかにリハビリテーションに繋げるかは、看護師の腕の見せどころです。Mさんの場合、低血圧に配慮しながら、1日に数回、起きる練習を行うなどして生活動作の自立をめざしました。もう一つは、思いの傾聴です。私たち看護師は昼夜を問わず、患者さんのそばにいますから、患者さんが話したいと思ったときに、自然と話を聞くことができます。一問一答とは違う〈会話〉を通じて本音を引き出し、チームに発信することは看護師の重要な役割です」(徳井)。

確かに人は誰でも、話したいときもあれば、話したくないときもある。そのタイミングを逃すことなく、本音を引き出せるのは最も身近な看護師の強みといえるだろう。「だ



から、スタッフにはいつも、患者さんに興味を持ってね、と話しています。その人自身や生活に興味を持ち、思いに耳を傾け、笑顔を引き出すような看護を、これからもみんなで実践していきたいと思います」と徳井は語る。

「決してあきらめない」という教訓を手に入れた。

Mさんは結婚式から半月ほどリハビリテーションを続けて、自宅に戻っていった。今回の看護を通じて、山崎はどんな教訓を得たのだろうか。「決してあきらめない大切さを改めて実感しました。最初、Mさんに会ったときは、正直なところ2カ月半後の結婚式に間に合わせる自信はなかったです。でも、あきらめなければ、ここまでできるようになるんだ、と確信を得ることができましたね」(山崎)。実は、趣味の多いMさんは、結婚式以外にもさまざま



な目標があった。たとえば、もう一度山に登りたい、自転車に乗りたい、アウトドアを楽しみたい、など。それらについても退院後に挑戦できるよう、スタッフみんなで精一杯サポートした。

今、山崎は「あきらめない」をキーワードにして、これまで以上に患者さんの嗜好や夢、目標を探り出し、どうすれば実現できるかを一緒に考えている。また、入院生活のなかでも、ささやかな喜びや楽しみを感じられるよう工夫を重ねているという。「たとえば〈洗濯が好き〉という方なら、タオルと一緒にたたんで時間を過ごしたり、〈カラオケが好き〉な方には、音楽を聞いていただいたりします。入院生活も、その人らしく過ごしていただき、退院後へ生きる喜びを繋げていきたいですね」。もともと人に興味があり、患者さんとおしゃべりするのが大好きだという山崎。「これからも、患者さんの夢や思いに寄り添って、どんな障害が残ったとしても、その人らしい人生を送れるように精一杯お手伝いしていきます」。そう言って、清々しい笑顔を見せた。

For the Best Rehabilitation

Topic 1

ICFモデルを用いて、患者さんの健康や生活を深く理解する。

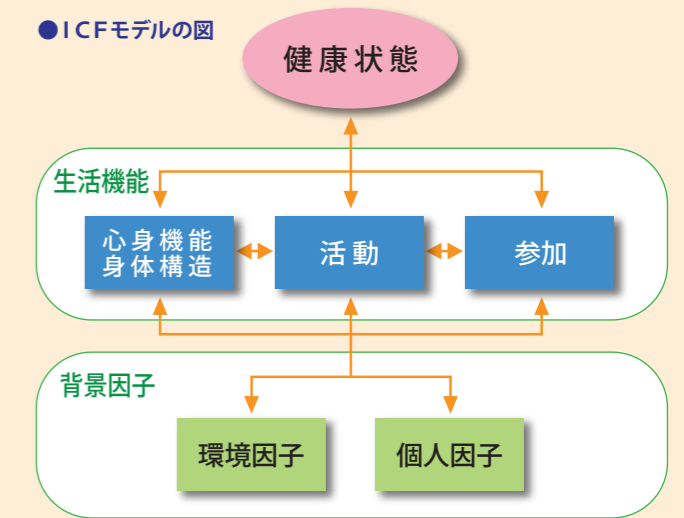
患者さんの生活復帰を実現するには、病気や障害だけでなく、その人を知り、思いや背景など生活すべてを理解することが大切である。そのために鶴飼リハビリテーション病院の看護部では、さまざまなツールを活用し、より良い看護に役立てている。

たとえば、ICF(国際生活機能分類)もその一つである。これは、WHO(世界保健機構)によって提唱された、世界共通の生活機能分類。患者さんの障害というマイナス面だけを見るのではなく、その人の生活機能を広い視点で見て、健康状態を取り巻くさまざまな事柄を体系立てて分類したものである。具体的には「健康状態」、3つの「生活機能」、2つの「背景因子」から構成され、その組み合わせで、約1500項目に分類されている。

看護部ではこのICFモデルを用いて、入院患者さんの健康や生活を多角的に分類。一人ひとり違う患者さんの

全体像を深く理解し、より親密なコミュニケーションを図れるように、そして、その人の思いに寄り添った看護を実践できるよう努めている。

●ICFモデルの図



Topic 2

患者さんのCBA重症度によって、関わり方を工夫する。

患者さんとコミュニケーションを図る上で大きな障壁となるのが、認知機能の低下である。同じ内容を伝えても、認知機能の程度によって、問題なく意思疎通が図れることもあれば、全く伝わらないこともある。そこで、看護部では「CBA重症度別の関わり方を示した一覧表」を用いて、スタッフの関わり方のスキルアップに努めている。CBA(認知関連行動アセスメント)とは高次脳機能障害の行

動評価のことで、意識や感情などを評価して「最重度・重度・中等度・軽度・良好」に分類されている。その重症度を横軸にして、縦軸に目標とする看護のあり方を並べ、患者さんにどのように関わり、介入していくべきかを示したのが、この一覧表である。

たとえば、患者さんにささやかな成功体験を持ってもらおうと考えたとき、CBA重症度によって異なるアプロ



チを行う。CBA良好の人には「外泊、外出を行い、退院後の生活をイメージする」、中等度の人には「目標のために何をしたらいいか一緒に考え共有し、成功時は一緒に喜ぶ」、最重度の人に対しては「覚醒を促すために日光浴をする。ケア一つひとつに対して丁寧に声かけをする」ことを看護のポイントに挙げている。このように患者さんの認知レベルに応じて関わり方を工夫することで、より質の高い看護の実践をめざしている。また、この一覧表を若手の教育にも活用し、「なぜ、この患者さんには、このアプローチを選択すべきか」をわかりやすく指導している。

Support Party!

鵜飼病院

地域に密着した病院として、
患者さん・ご家族を支えます。

当院は、地域に密着した病院として近隣の病院や診療所と連携を取り、患者さんにとってより快適な入院診療・外来診療を提供できるよう努めています。急に体調が悪くなられた方や、救急車の受け入れにも対応しており、整形外科手術も行っています。

また、患者さん、ご家族の「自宅で生活を」という気持ちにお応えできるよう、リハビリテーションにも力を入れています。法人内外の居宅介護支援事業所や訪問看護ステーション等の介護保険サービス事業所と協力し、患者さんのご自宅での生活を支えます。



施設概要

リハビリテーションを中心に医療・福祉活動を展開しています。最先端設備と人に優しい環境を整え、患者さん一人ひとりを支えます。

診療科目：内科・神経内科・外科・消化器外科・整形外科・リハビリテーション科・放射線科

病床数：120床（一般病床30、地域包括ケア病床30、療養型病床60）

外来受付時間

月～金曜日 9:00～12:00 / 15:30～18:00

土曜日 9:00～12:00

休診日 日・祝

※在宅医療サービス、介護保険サービスも行っています。

通所リハビリ ウカイ

■通所リハビリテーション（1～2時間）・（3～4時間）

病院でのリハビリと
同等のリハビリの提供に努めています。

介護保険で行う通所リハビリテーション施設（デイケア）です。利用者さんの状態やニーズに合わせ、医師やリハビリ専門スタッフがサービスを提供します。理学療法士・作業療法士・言語聴覚士を配置し、病院でのリハビリ（医療保険）が終了となった場合でも同等のリハビリを提供できるよう努めています。

日常生活での動作獲得やコミュニケーション能力の向上等をめざし、身体機能や筋力の維持・向上がはかれるようプログラムを立案。個別リハビリ、機器での筋力強化やマッサージ、物理療法の低周波やホットパック等を行います。



施設概要

体力や基本動作能力の向上をはかりたい方を対象に、20～40分の個別訓練と1～3時間程度の自主訓練を行います。

対象：要介護・要支援認定の方
ご利用日：月～金曜日
（祝祭日、年末年始を除く）

ご利用時間：午前 9:00～12:30
午後 13:30～17:00

サービス内容

○3つのコースと利用者に応じた個別リハビリテーション

○健康状態の確認（メディカルチェック）など
※食事・入浴・送迎はありません。

鵜飼リハビリテーション病院

■通所リハビリテーション（1～2時間）

利用者さんの状態に合わせ、
専門スタッフがリハビリや運動を実施します。



介護保険で行う通所リハビリテーション施設（デイケア）で、1時間30分の短時間型通所リハビリを提供しています。病院を退院した後、安心してご自宅での生活が送れるよう、専門スタッフ（理学療法士）が利用者さんの状態やニーズに合わせて、個別リハビリ（20～40分）や機械を使っでの運動（40～50分）を実施します。

また、平成24年から、要介護者の方に限りお宅を訪問しています。実際の生活現場で情報収集を行うことで、解決が必要な課題を明確にし、より充実したリハビリを提供できるよう、スタッフ一丸となりサポートしています。

施設概要

利用者さんの状態に合わせ、20～40分の個別訓練と1時間程度の自主訓練で体力や基本動作能力の維持・向上をはかります。

対象：要介護・要支援認定の方
ご利用日：月・木・火・金・水・土
（祝祭日を含む）

ご利用時間：午前 9:00～10:30 / 10:30～12:00
午後 13:00～14:30 / 14:30～16:00

サービス内容

○筋力増強訓練や関節運動など
○食事・排泄・更衣・入浴など日常生活動作
○住宅環境の整備
○ホームプログラムの指導 など
※食事・入浴・送迎はありません。

大門訪問看護ステーション（鵜飼在宅センター大門2階）

短期間の利用も可能。
退院後の不安を取り除きます。

「退院後すぐに体調が悪くならないだろうか」「自宅でどんな運動をすればいいのだろうか」「トイレやお風呂の介助がうまくできるだろうか」など、退院後の不安はどなたもお持ちだと思います。

当ステーションでは、退院前のリハビリ見学等を通して入院スタッフからの情報収集を実施しており、退院後、看護師やリハビリスタッフ（理学療法士・作業療法士・言語聴覚士）が週1～2回程度訪問して、ご本人の状態や環境に合わせた指導・援助をしています。退院後から生活が落ち着くまでの短期間利用も可能です。



施設概要

看護師、リハビリスタッフがご自宅に訪問し、利用者さんやご家族が安全・安心に暮らせるよう、在宅生活を支援します。

営業日時：月～金曜日 9:00～18:00
（祝祭日、年末年始を除く）

サービス提供地域：中村区・西区・中川区

サービス内容

○健康状態・病状観察
○日常生活の支援
○医療処置・カテーテル管理支援
○在宅リハビリテーション
○看護・介護・住宅改修・福祉用具の助言、相談 など

※ご利用にあたっては医師の指示書が必要です。ステーションにお問い合わせいただくか、ケアマネージャーにご相談ください。
※看護師の24時間対応。